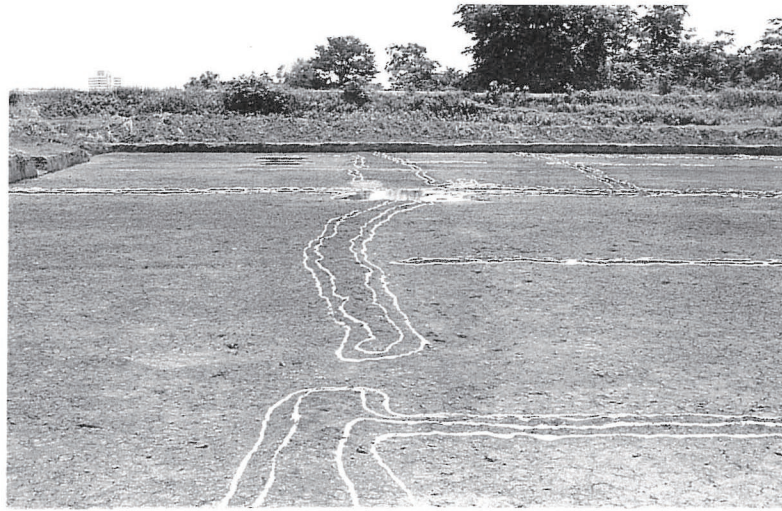
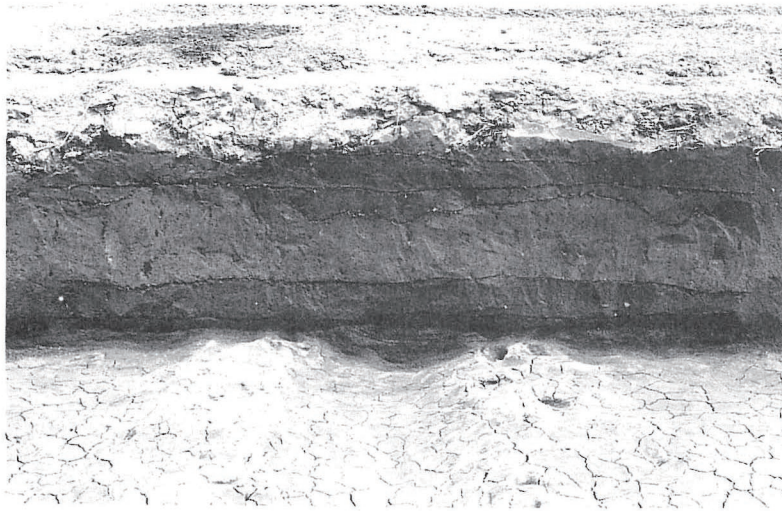




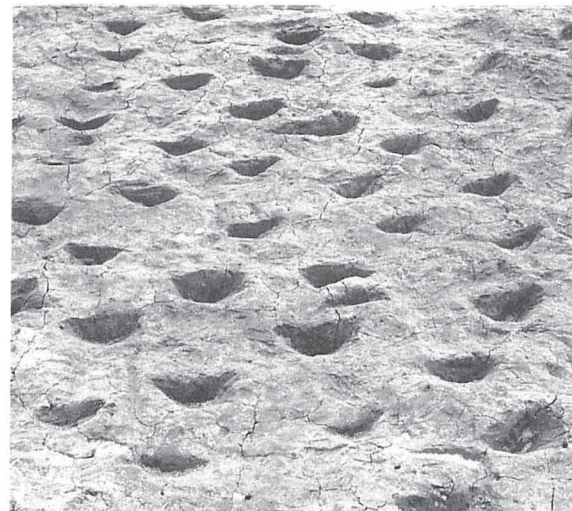
Ⅲ区 東西大畦畔 西より



SP G～G'



Ⅲ区 馬足跡歩行状況 西より



Ⅳ区 鋤先痕

(4) 中世畝状遺構と備前堀

西に滝川、東に利根川が流れ、両河川をつなぐ形で滝川放水路が東西に流れており、本調査区は放水路の南に展開している。調査は建物部分を中心に調査区を設定し順にA～D区に分けられている。

〈中世畝状遺構〉

備前堀に切られる状況で検出されたのが波板状の凸凹面で構成される畝状遺構（畑）があった。現地表から約70cm下に位置し、上部を何層もの洪水層に覆われていた。畝状遺構の直上に淡黄褐色の微細な粒子より成る洪水層が凹部で5～6cm、凸部で1～2cm堆積していた。この上に細かい砂粒を多く含んだ暗褐色の小礫層が覆っていた。畝状遺構の検出面を概観すると畝の方向等によって区画されていることが知れよう（模式図参照）。隣りとの境が明確に溝で区画されているのはg～i・j～lを一区画と考えると8ブロックであるが、j～kについては凸部が重機によって削平されてしまっているが区画の境の溝は存在したと考えられる。従ってここでは仮に12ブロック（a～l）に分けてみた。概して畝の方向は南北でありe及びjブロックのみが東西方向に切られている。これら畝の方向や区画は、そこに作られた耕作物や各々の耕作者によって区別されたものであろうか。現況からは、それを判断する資料は極めて少ないと言えよう。fブロックは一見、畝が無いように感ぜられるが、極めて小規模であるが凸を有し、これが南北に通じている。又、洪水と人間の闘いを示す状況が畝の作り直しとして確認できる部分がある。これはcとfブロックの境で特によく観察される。耕作中の畝を洪水層（淡黄褐色砂層）が覇い、畝を作り直した上に更に洪水層が覆っており、畝と洪水層がサンドイッチ状態で観察できる。この畝状遺構を大きく区画するかのようにA区の南側で東西に走る道状の高まりを検出した。この凸部は踏み固められたように硬く、長い年月にわたって使用されたものと思われる。この道状の高まりの両側は、北より南が一段低い溝となり、そこから畝へと立ち上がっている。この道状の高まりの南側のkブロックで石組の井戸が検出された。垂直に掘られているが、上面から約0.9mまで河原石が短辺を奥にして積んであった。内部から遺物は出土しなかった。利根川の堤防に沿ったB～D区でもA区と同様の畝状遺構が検出された。B区では北側において上端巾約0.5mの凸部が東西に走っていた。この凸部も畝の区画の一種かと考えられる。C区は東西に畝が走るが東側に区画の溝がみられた。そしてD区では、A区の道状の高まりと接続すると考えられる凸部が東西に走っている。この北側で畝は東西に切られ、南側では畝は南北に切られている。A～D区を通して遺物は畝上層の

洪水層中（上）にみられ、土師質小片が400点以上検出された。

〈備前堀〉

西横手の古老の間には昔より通称^{びぜんぼり}備前堀（以下備前堀）と呼ばれる堀の存在が語り継がれていた。これは17世紀に玉村代官であった伊奈備前守忠次が利根川の豊かな水を引水し、玉村の地に多くの稲の収穫を目指す為に用水を計画・試掘したこと起因しているという。しかし、この備前堀用水の計画は途中で坐折し、そのかわりに天狗岩用水を利用して玉村まで引水してできたのが現在の滝川（用水）であるという。A区の西端に南北に伸びる窪地があり現況で水田として利用されていた。これが備前堀の跡と伝えられており、調査によって堀の存在が確認された。上端巾約4m、下端巾約1m、深さ約4mであった。堆積状況は、微細な川砂による砂層が厚くみられた。堀の地山は利根川の影響によると思われる洪水層からなり、流れによって崩れやすいので備前堀の肩口にあたる部分には黒色の粘質土が貼りつけられる様な状況で検出されている。流水によって削られ、崩れた土砂によって堀が除々に埋っていくのを防ぐ為の策であろうか。尚、堀の中から遺物の出土はなかった。（高橋）

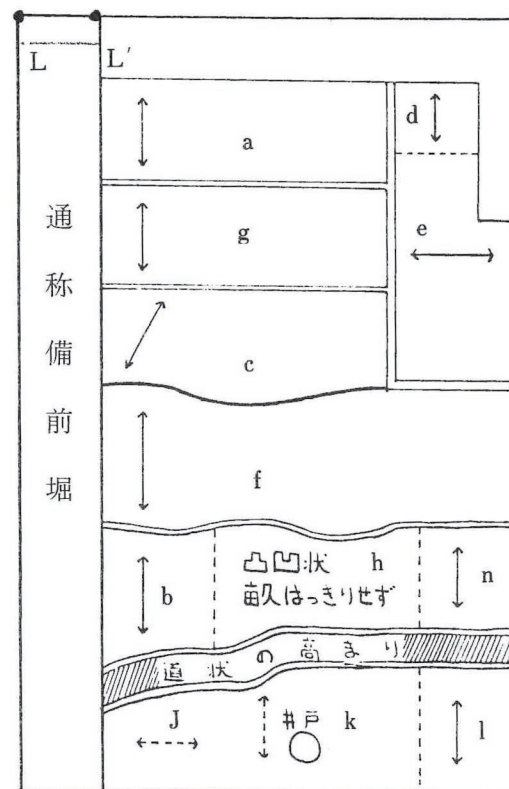


図14 A区畝状遺構模式図

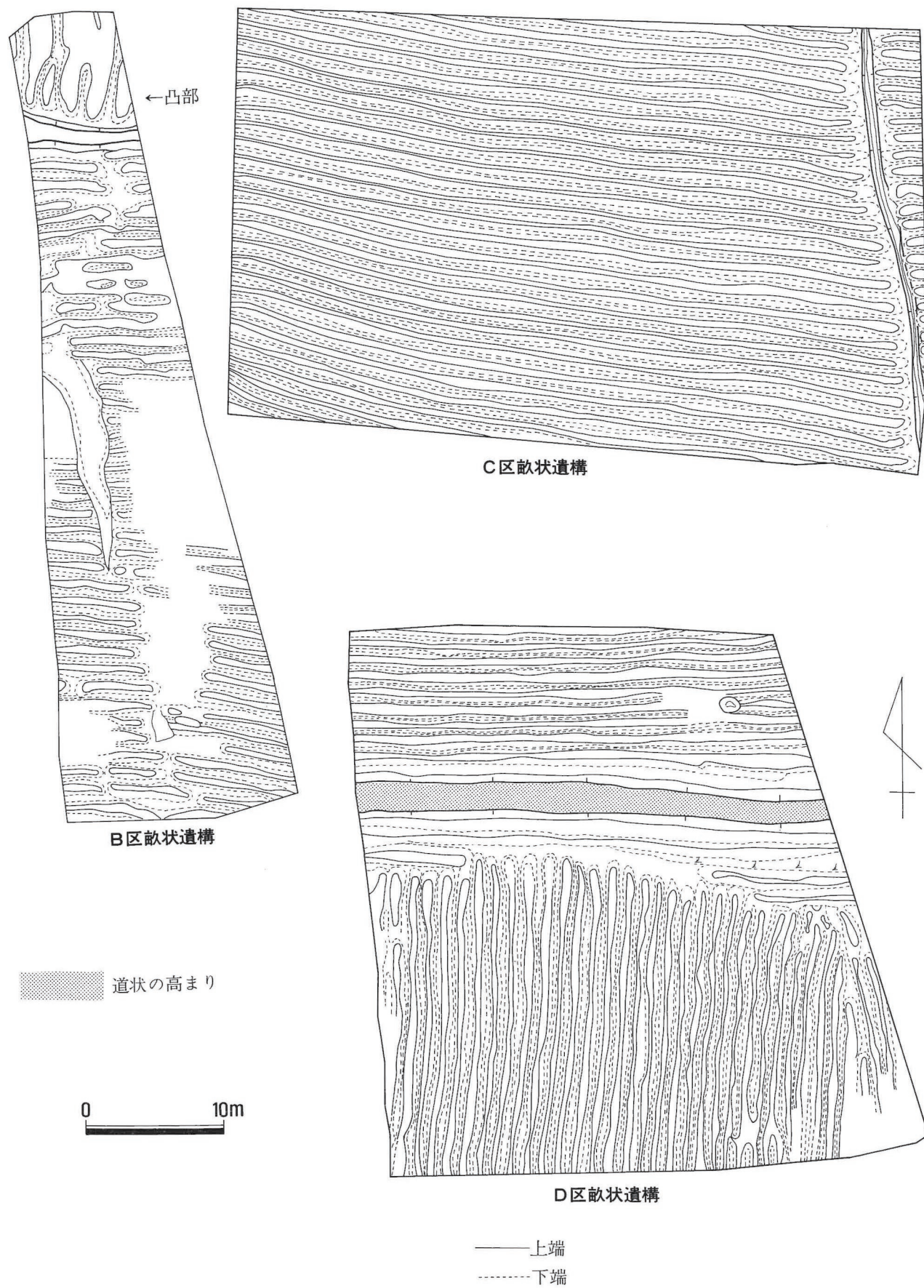
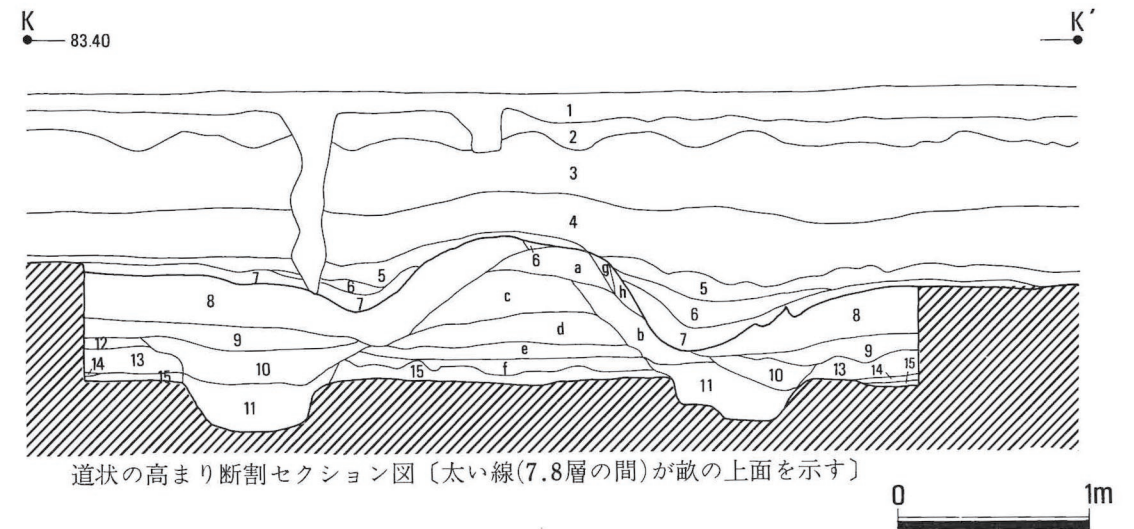


図15 B・C・D区畝状遺構全体図



- | | | | |
|------------|--|-----------|---|
| 1. 暗茶褐色砂質土 | A 軽石を含む。表土（現況細地）。 | 13. 黄白色土 | 粒子が細かく粘性をもつ。 |
| 2. 暗茶褐色砂層 | 粒子の細かい砂層。 | 14. 暗灰褐色土 | 粒子が細かく粘性をもつ土。鉄分斑文が見られる。 |
| 3. 茶褐色砂層 | 粒子の細かい砂層。上面が畝状を呈している。 | a. 暗灰茶褐色土 | 畝を形成する土に類似するが、色調が暗い。全体的にしまっており固い。 |
| 4. 明茶褐色砂層 | 粒子の細かい砂層。 | b. 暗灰茶褐色土 | a 層と同様だが、全体的にしまりが無い。 |
| 5. 暗灰色砂層 | 粒子が比較的大きい砂（いわゆる川砂）で、円礫や炭を含む。 | c. 暗灰茶褐色土 | 含まれる砂の量が多い。全体的にしまっており固い。 |
| 6. 明灰褐色砂層 | 粒子が非常に細かい砂層。 | d. 明黒褐色土 | 砂を主体にする層で、灰褐色微砂の小ブロックが若干混じる。全体的にしまっており固い。 |
| 7. 黄褐色微砂層 | 粒子が非常に細かい砂層で、わずかに粘性をもつ。 | e. 黒色土 | 黒色化した砂を主体にした層。 |
| 8. 灰茶褐色土 | 若干粒子の粗い砂の混じる、しまりのある土。畝を形成する土で、土塊状部分の上面は固い。 | f. 黒色砂層 | 全体的にしまっており固い。 |
| 9. 明黒褐色土 | 黒色化したB 軽石を主体にする土。 | g. 灰褐色土 | 粒子が細かい砂層で、しまりが無い。 |
| 10. 黒色土 | 黒色化したB 軽石と粘性をもつ黒色土が混じる土。 | h. 明灰褐色土 | g 層と類似するが、粒子がさらに細かい。しまりが無い。 |
| 11. 黒色土 | 黒色化したB 軽石を主体に、粘性をもつ黒色土と灰白色土小ブロックを含む。 | | |
| 12. 灰白色土 | 粒子が細かく粘性をもつ土。鉄分斑文が見られる。 | | |

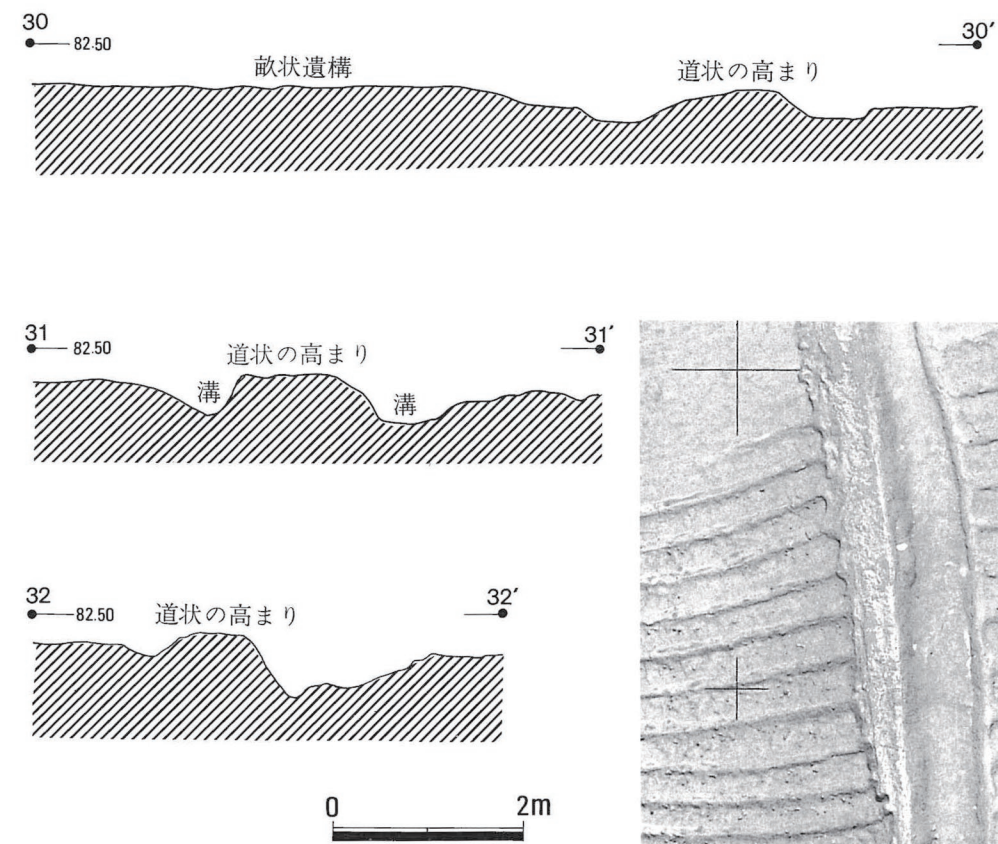
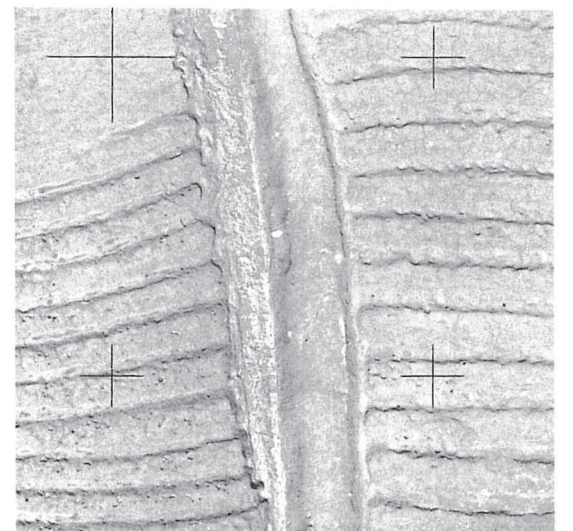


図16 道状の高まりセクション・エレベーション



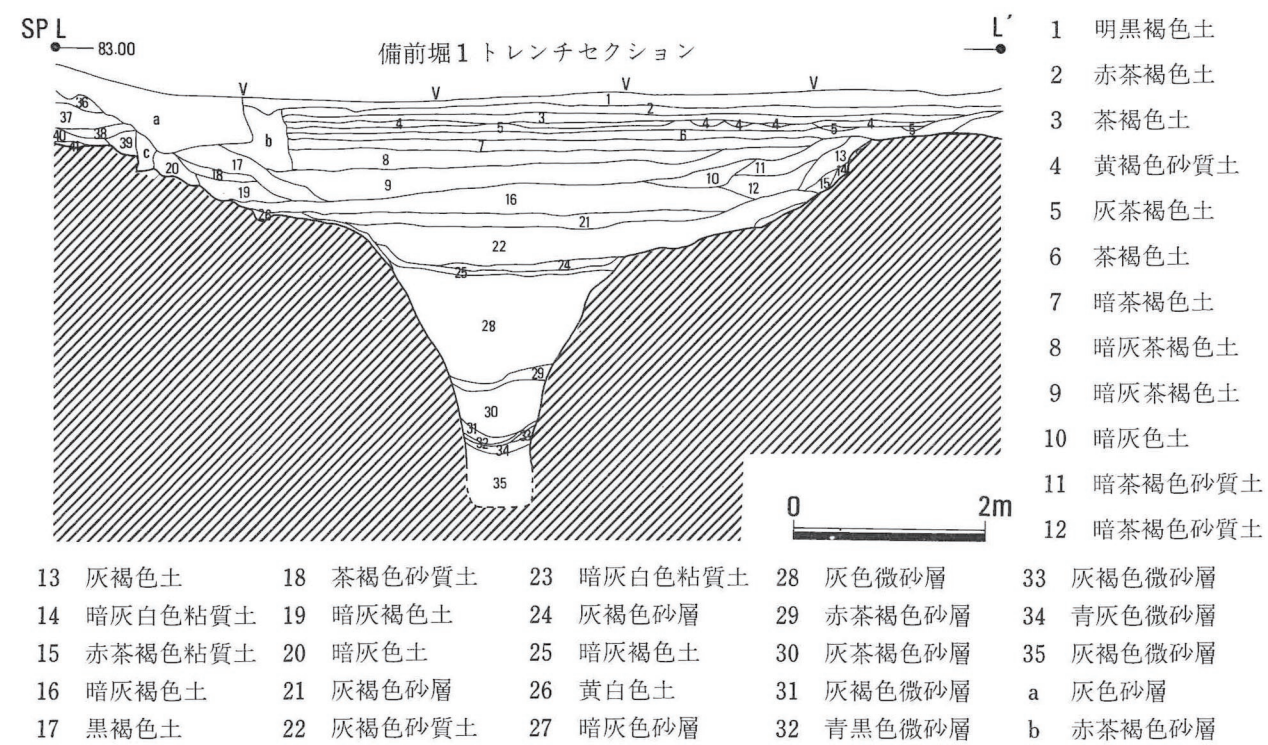
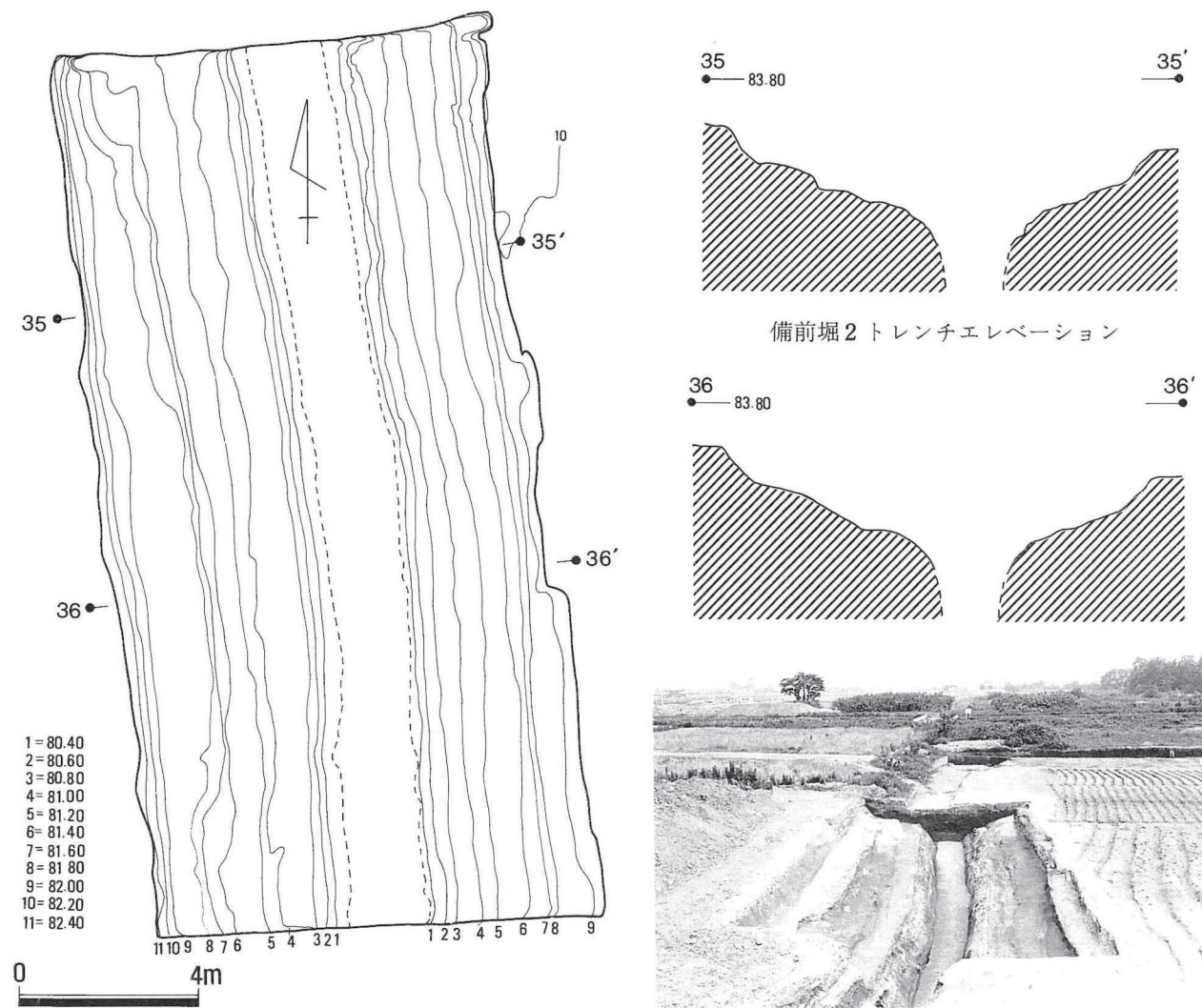


図17 備前堀2 トレンチ平面図及び備前堀1 トレンチセクション

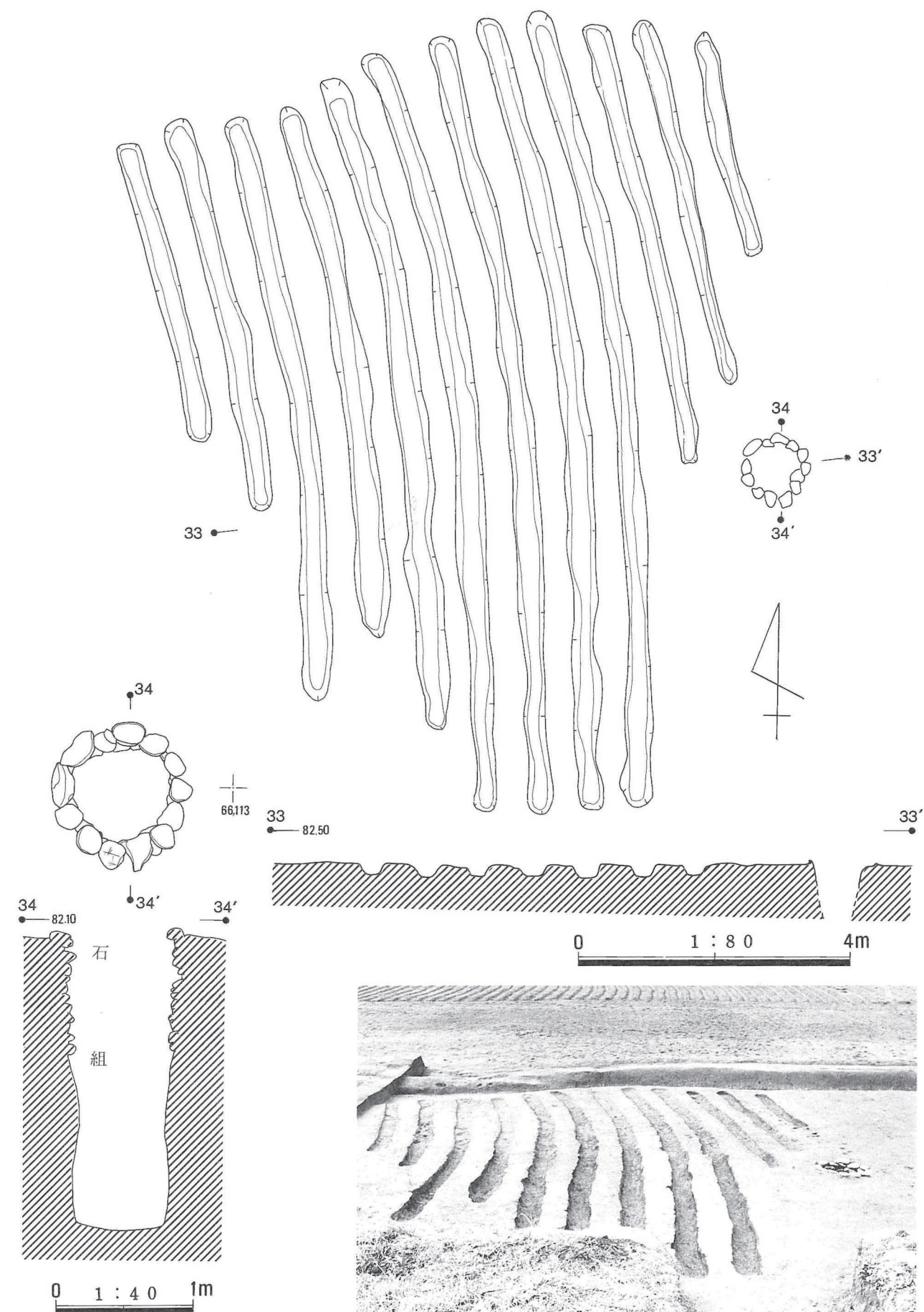


図18 A区石組井戸と畝状遺構

A区石組井戸と畝状遺構 南より

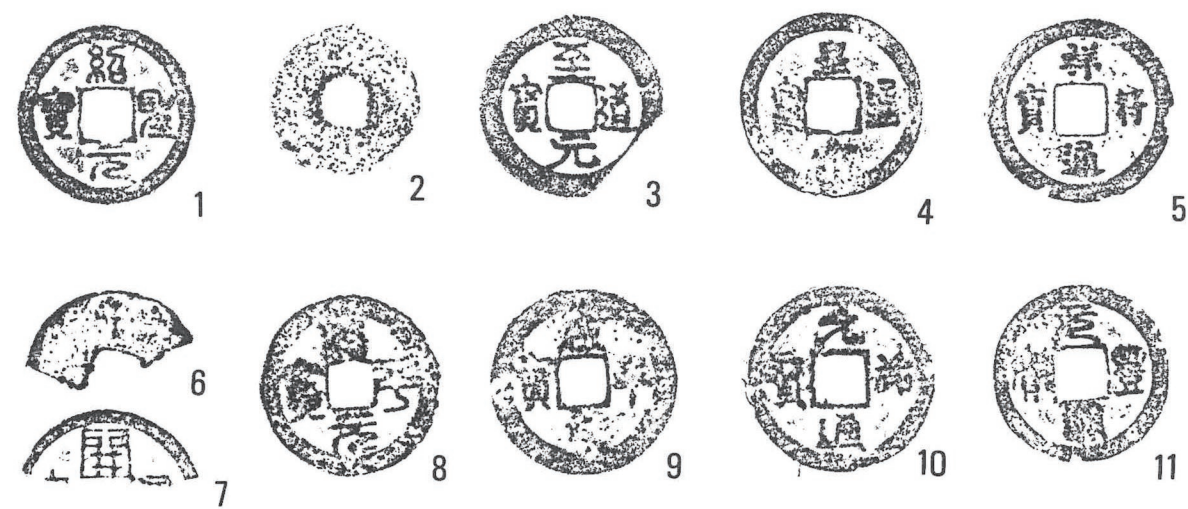
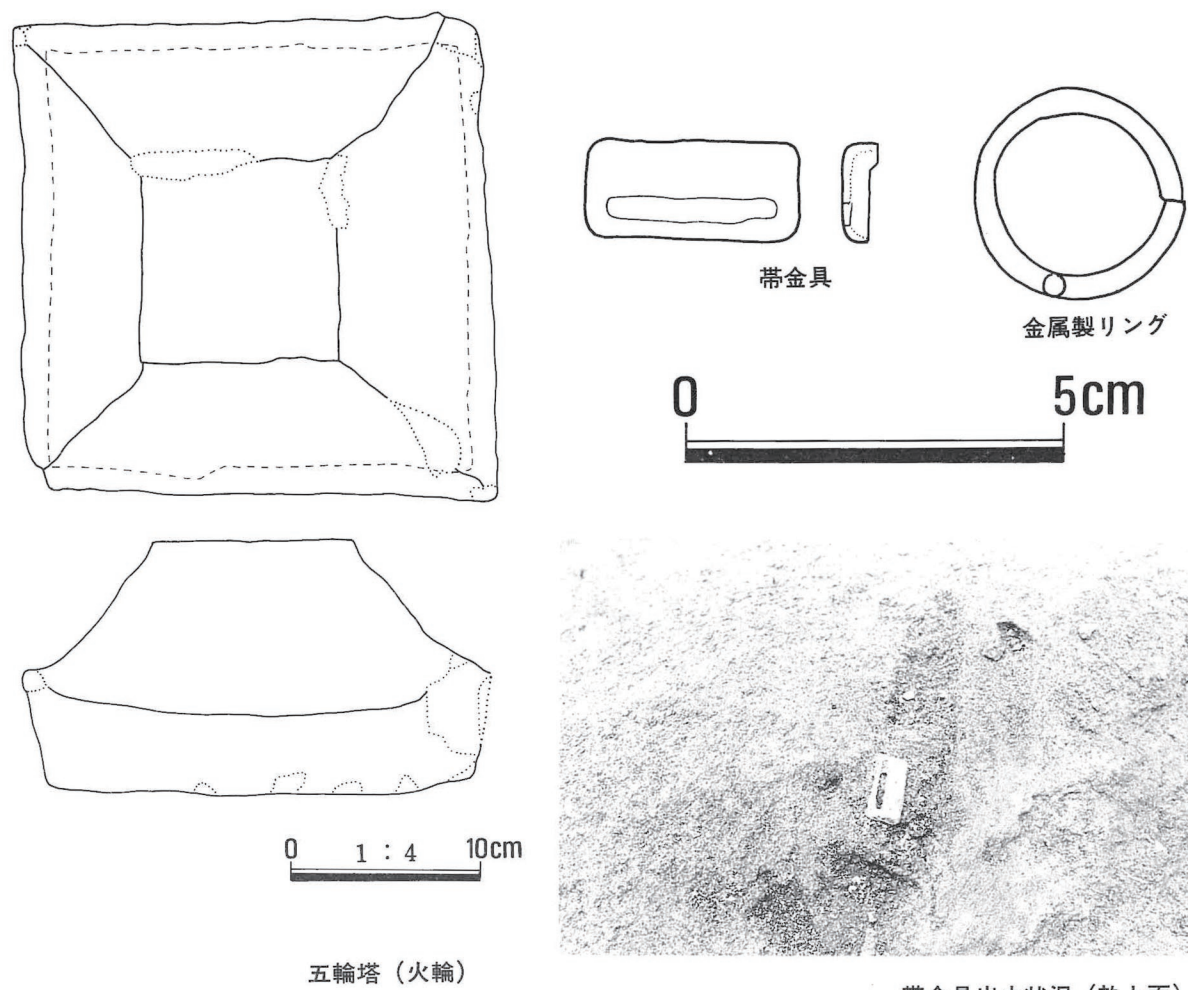


図19 出土遺物

表2 古銭一覧表

番号	出土地	銭名	鑄造年	備考	番号	出土地	銭名	鑄造年	備考
1	A区	紹聖元寶	1094	北宋	7	A区	開・・・	?	?
2	"	?	?	?	8	"	治平元寶	1064	北宋
3	"	至道元寶	995	北宋	9	B区	咸平元寶	998	"
4	"	皇宋通寶	1039	"	10	A区	元祐通寶	1086	"
5	"	祥符通寶	1009	"	11	"	元豐通寶	1078	"
6	"	?	?	?					3分の2欠失



A区畝状遺構全景 空中写真上が北



調査前の様子（備前堀の部分）北より



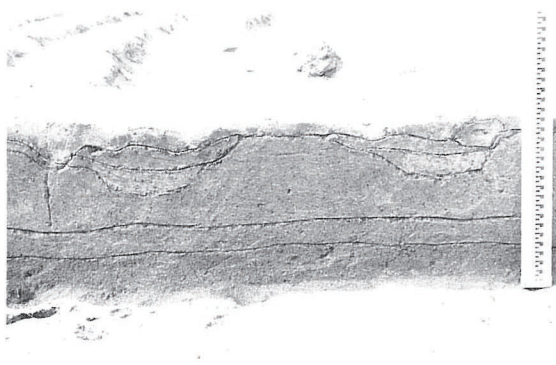
畝状遺構と備前堀 北より



備前堀1 トレンチセクション



備前堀1 トレンチセクション



畝状遺構セクション



畝状遺構 手前よりb、aブロック 南より



備前堀2 トレンチと畝状遺構



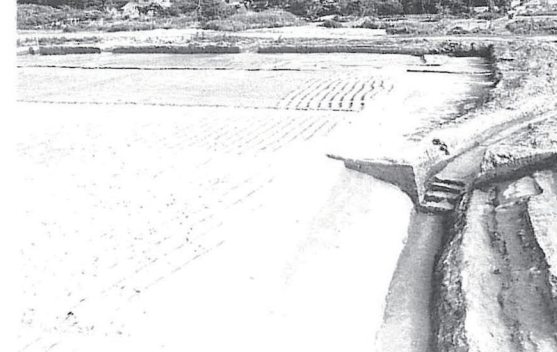
A区古銭出土状況



畝状遺構 Cブロック 南より



畝状遺構 fとhブロック 西より



備前堀2 トレンチと畝状遺構 北より



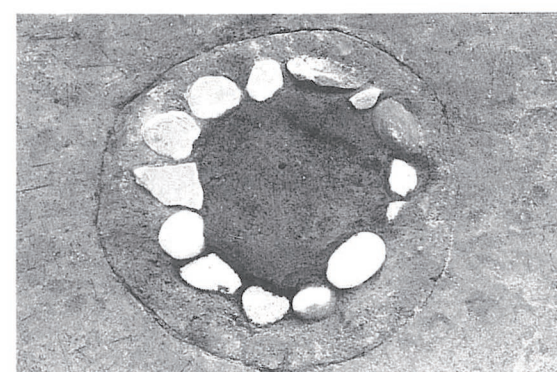
A区畝状遺構セクション



畝状遺構 fとgブロック 北より



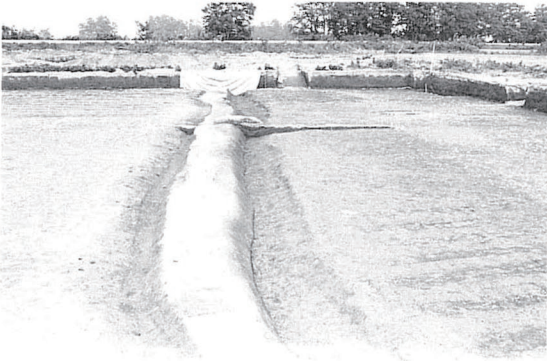
作業風景



石組井戸址検出状況



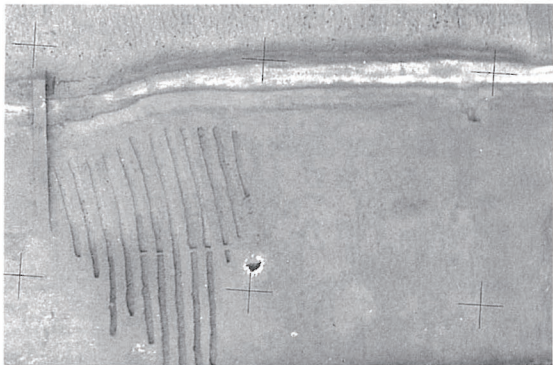
石組みの様子



A区 道状の高まり 西より



道状の高まりセクション



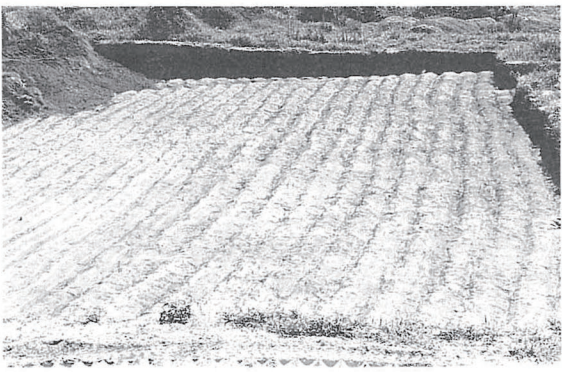
道状の高まり（空中写真）



B区全景 南より



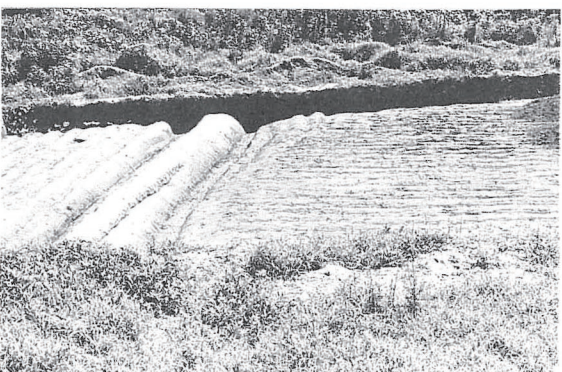
B区の凸状部分



C区全景 西より



D区全景 西より 中央は道状の高まり



D区 道状の高まり 西より

VI 調査の成果と問題点

以上、今回の調査では、古墳時代前期の周溝墓、古墳時代後期水田址、平安時代水田址、中世の畝状遺構と遺物が検出されている。その他弥生時代後期の樽式土器の土器片も検出されている。以下、若干ではあるが、今回の調査の成果と問題点について時代順に触れて見たい。

〈弥生時代後期〉

遺構は検出されていないが、F A下水田耕作土下の土層確認などの際、樽式土器片が検出されている。

I・II区では、浅間山C軽石層の堆積が一部で認められ、その直下には水田耕作土と考えられる、黒褐色粘質土が存在する。弥生時代後期より浅間山C軽石層降下まで継続する水田開発の可能性が伺える。

〈古墳時代前期〉

II区北西隅より1号周溝墓が検出されている。周溝内の出土土器群は、いわゆる石田川式土器の範ちゅうに収まる資料と考えられるが、樽式土器系高坏、輪積み痕を明瞭に残す大型壺なども出土している。

マウンド下に浅間山C軽石層の堆積が認められ、またS字状口縁台付甕をもって、井野川流域の編年観^{註1}に対比すれば、およそ4世紀中葉代に比定できる。浅間山C軽石の降下は4世紀中頃とされており、本遺跡では同テフラ降下後一部墓域として存在する。同年の追加調査（1989年報告予定）では、II区の西側30mに同時期のS字状口縁台付甕を出土する大溝が、南北100m以上確認されている。この大溝は、農業用灌漑用水なのか墓域設定の区画溝なのか同定できないが、対象地西沿辺では同時代の資料が散見できる。同時代の墓域は、集落域と近接している例も多く、対象地西辺に集落域が展開している可能性が考えられる。

古式土師器と在地弥生式土器の共伴は、近年その類例が増加しているが、1号周溝墓例や大八木箱田池17号住例^{註2}のように、古式土師器の影響をうけながらも、4世紀中頃まで、その命脈を保っていることが理解できる。

〈古墳時代後期〉

F A下水田址のみの調査であるが、対象地のほぼ全域にF Aの堆積が認められ、その直下に水田耕作土と同様の黒色粘質土が存在する。広範囲にF A下水田址が存在し、集落域については、現況の西横手、萩原の集落域に展開しているものと考えられる。また近在の古墳では、南方約3kmに綿貫古墳群（不動山古墳、二子山古墳等）に大規模前方後円墳が存在する。

今回の調査では、小区画水田址と平均36㎡を超える比較的規模の大きい水田址の双方が大畦畔による区画単位で検出されている。双方ともF A層に埋没するまで水田としての機能を備えており、同時期に存在するのは明らかである。本遺跡では、自然傾斜の勾配率はごく低く平坦地であり、平均36㎡を超える単位で区画造作が可能な地域にある。F A水田下の浅間山C軽石層の堆積量も部分的に3cmほど認められる程度で、F A層堆積までにはほとんど水田耕作土と混合しており、保水性も高い。本市芦田貝戸・御布呂遺跡例と同様にF A層堆積時まで小区画水田を採用する理由は何に拠るものであろうか。能登 健氏は群馬町同道遺跡^{註3}の調査例を基に、小区画水田址の特性を火山災害の復旧（主に漏水対策）に基づく技術上の問題としている。しかし、地域を異にし浅間山C軽石の被害が比較的少なく、平均36㎡以上の規模の水田区画が同時存在する本遺跡や本市並榎北遺跡^{註4}においても、広範囲に小区画水田が造営されている。このことは、単なる災害復旧上の技術的問題にとどまらず、明確な根拠は存在しないものの、制度的要因に基くものとも考えられる。

1トレンチ北側では、御布呂・芦田貝戸例と同様、整然とした小区画水田址を検出しているが、この範囲ではほぼ全域にサン・クラックが確認されている。その状況からかなりの乾燥状態、具体的には秋から冬の季節を通り過ぎていることが想起される。このサン・クラックの検出された範囲は、1トレンチの中では最も標高が低く、

しかも大畦畔には、水口が開かれた状況で存在する。大畦畔を挟んで西に接する区画内にも、同様に基盤目状の小区画水田址が検出されているが、サン・クラックは確認できない。この範囲の小畦畔は、水田面との比高差は高いものの不整形でやや蛇行し、水田面は平坦でなく、代掻き・クロぬり以前のような状況を示している。

田起しから始まる農事サイクルの中で、双方の水田址の同時期存在は不可思議である。サン・クラックの存在する小区画水田範囲については、遺構の残存状況な良いものの、F A層堆積時には、前年より放置されたままの状態であり、「休耕田」と理解したい。

またI区南東隅の小区画水田址は、畦畔は低く幅広でまさに潰れた状況を示し、小区画水田址としての機能を失っていると考えられる。またアラ起しと考えられる無地のままの状況を示す区画も存在するが、無地の水田範囲のものは、アラ起し直後F A層に埋没したと理解するには、凸凹も全体的に丸味を滞び、ガドがとれている。また同テフラと水田耕作土の逆転なども見い出せない。サン・クラックが存在したり、畦畔が潰れていたり、各々異った状況は、大畦畔によって区画された単位で認められる。この大畦畔によって分割された各ブロックの状況は、必ずしも同年あるいは同一時期の造作とは考えにくく、各ブロック単位で、「休耕田」が存在し、複数の年サイクルにより経営されていたものと理解したい。

〈平安時代後期〉

B軽石下水田址のみ検出されている。いわゆる条里型水田址で、一辺110m前後の単位で大畦畔により区画分割されている。南北大畦畔は、中央に水路を伴い、東西大畦畔は、部分的に下幅で2mを超す規模を有し、馬入的状況を呈す。この大畦畔によって区画された単位内では、さらに小畦畔によって区分されており、それは規模・形態もそれぞれ異なっている。

各水田面には、足跡が多数存在するが、人間の足跡以外に馬と考えられる円形ないし長円形の痕跡が確認されている。長円形のものは前足、円形のものは後足と推定される。1トレンチでは人足跡と馬足跡の両方が近接して検出されている。具体的に、馬耕を示すような資料は検出できなかったが、本市長野北部遺跡群^{註7}では牛足跡が、同市岡久保遺跡^{註8}では馬足跡が検出されている。牛耕・馬耕は、ともに後世開始されたと考えられているが、B軽石下水田址の経営上、牛馬ともに使用したとの可能性を考えたい。(桜井)

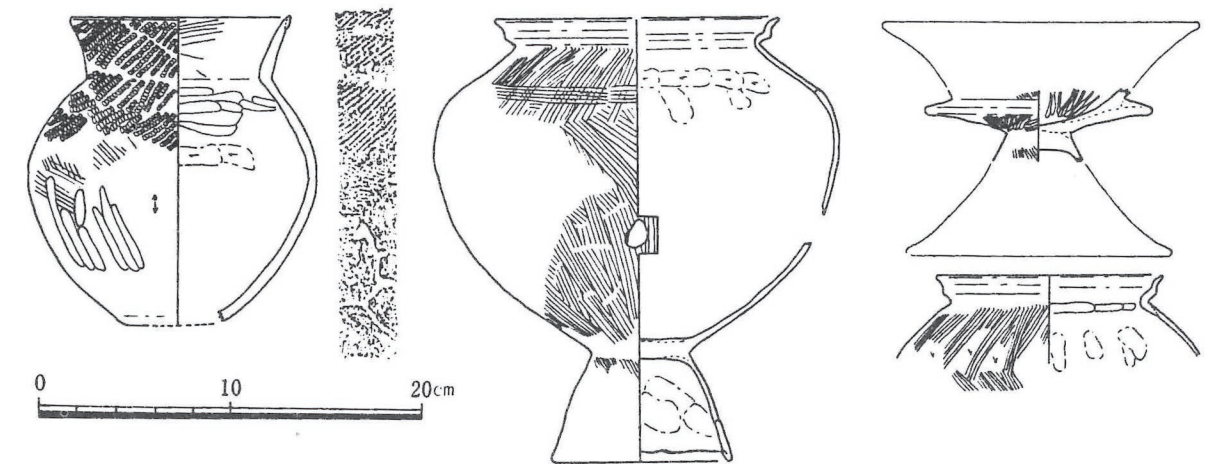


図20 箱田池17住出土遺物

註1 田口一郎他 『XI 出土遺物の検討』 「元島名將軍塚古墳」 高崎市教育委員会 1981
註2 桜井 衛他 『大八木箱田池遺跡II』 高崎市 1984
註3 田村 孝他 『芦田貝戸遺跡II』 高崎市教育委員会 1980
註4 神戸聖語他 『御布呂遺跡』 高崎市教育委員会 1980
註5 能登 健他 『同遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
註6 関口 修他 『並復北遺跡』 高崎市教育委員会 1988
註7 金子智一他 『六反田・中屋敷(II)遺跡』 高崎市教育委員会 1986
註8 久保泰博他 昭和62年度 高崎市教育委員会調査。



図21 条里模式図

高崎市文化財調査報告第94集

西横手遺跡群（Ⅰ）

平成元年 3 月 印刷

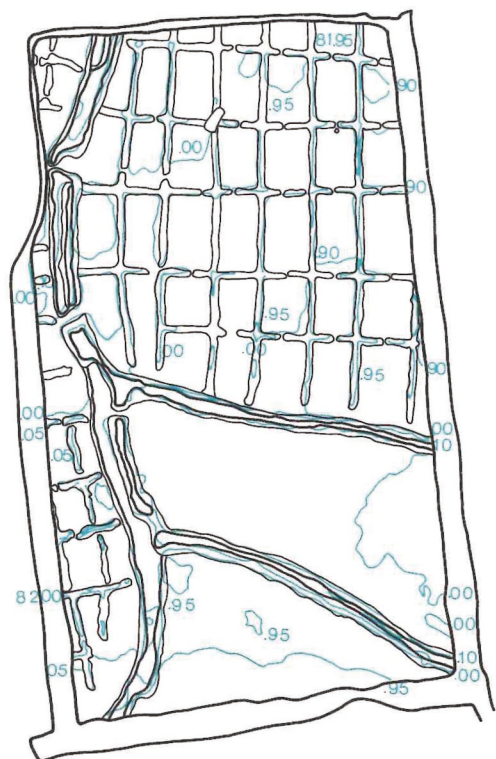
平成元年 3 月 発行

編集者 高崎市教育委員会

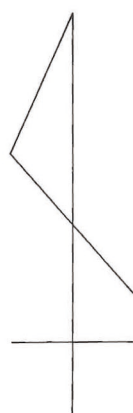
社会教育課文化財保護係

発行者 高崎市教育委員会

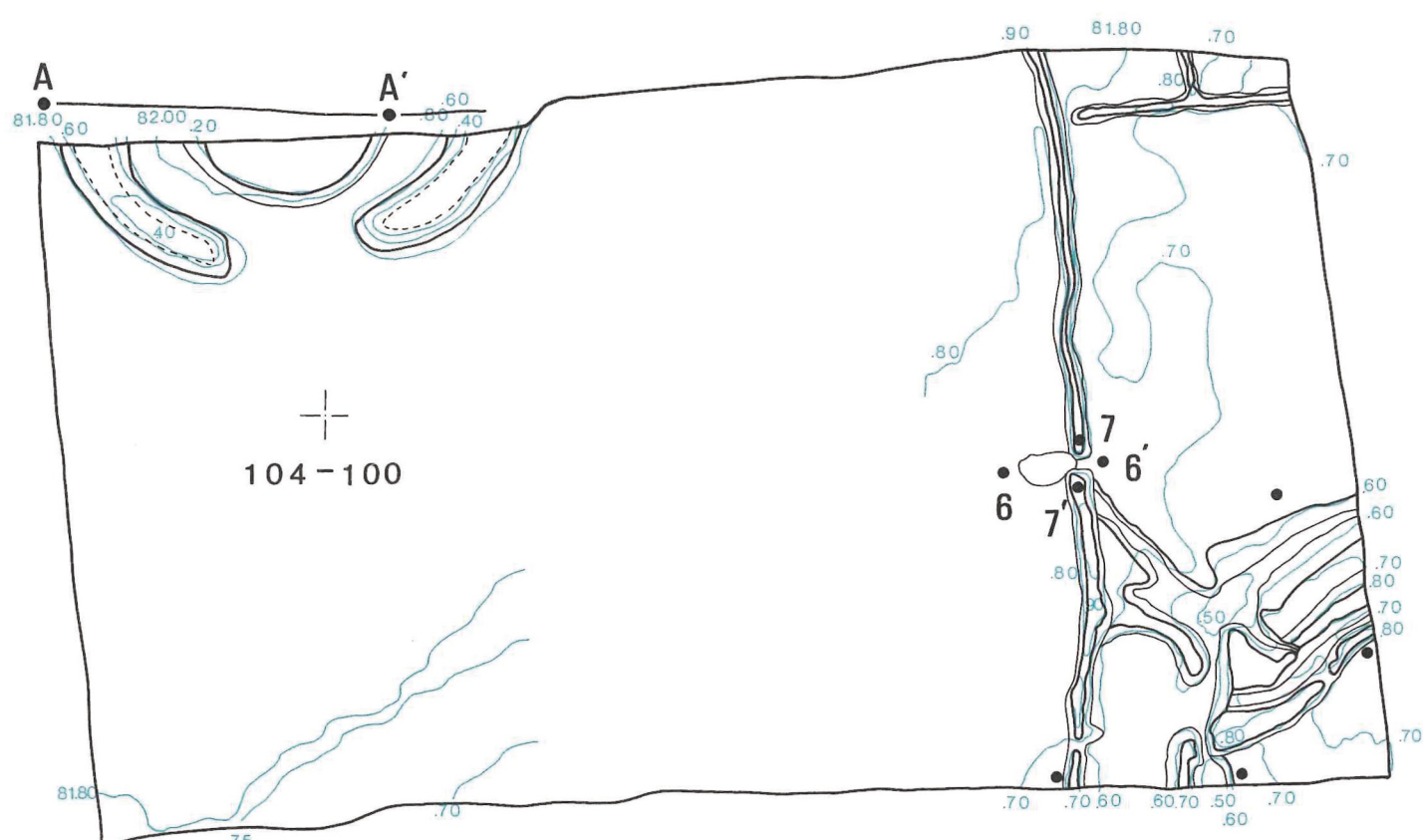
印刷所 荒瀬印刷株式会社



108-101



Y-67.875
X+37.205
108-105



104-100

104-105

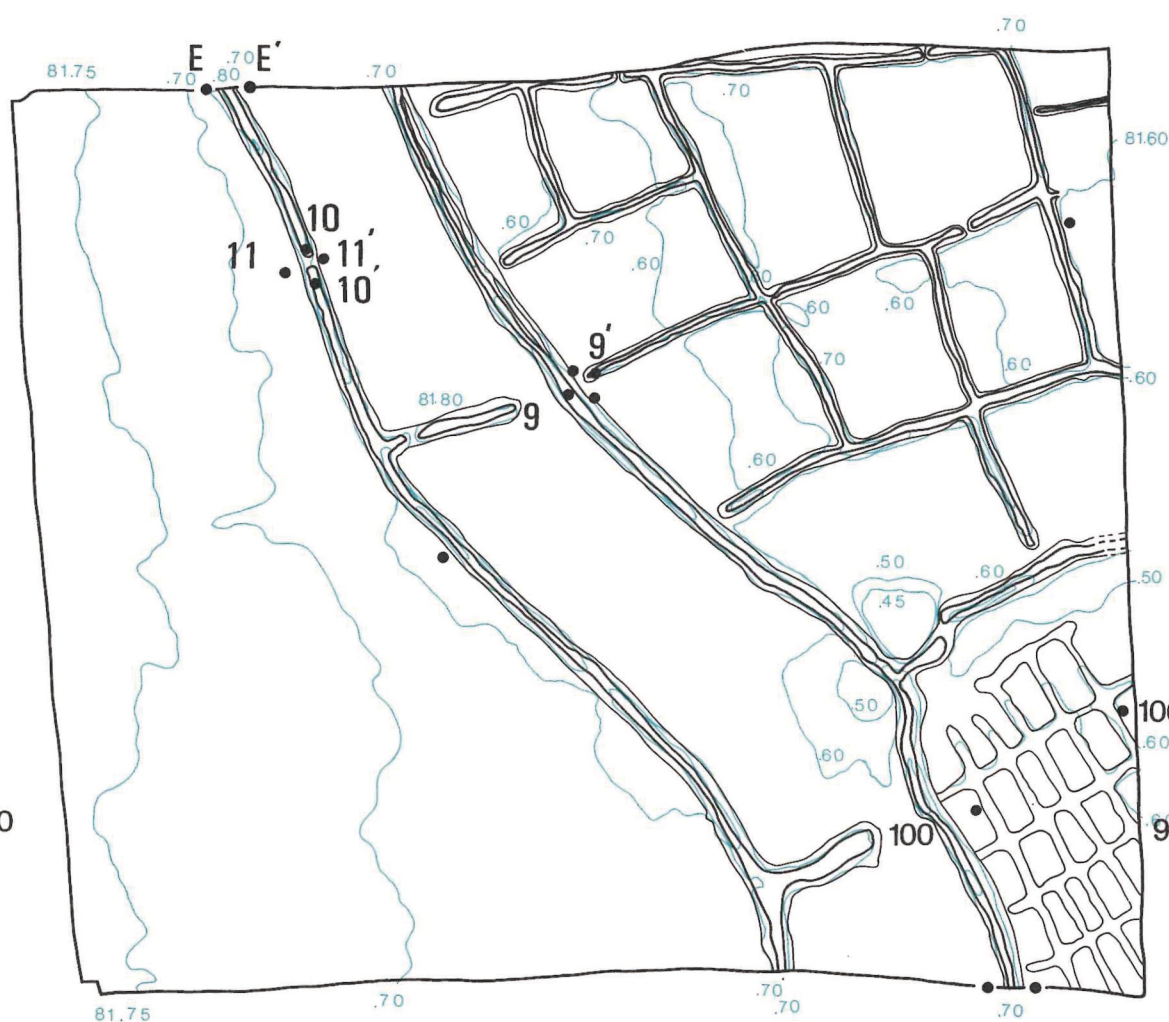
100 81.80

100'

0 1 : 40 2m

100-100

100-105

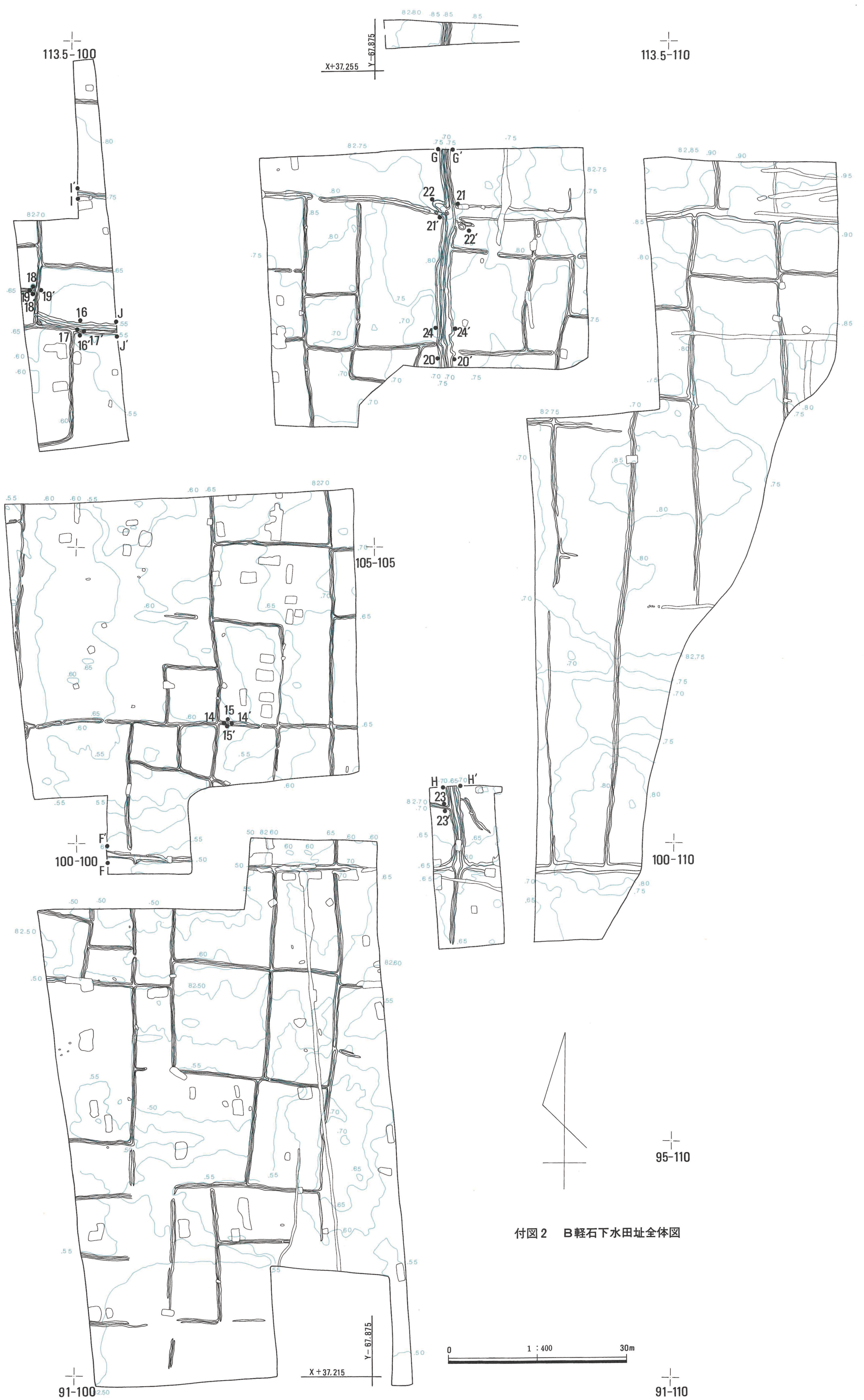


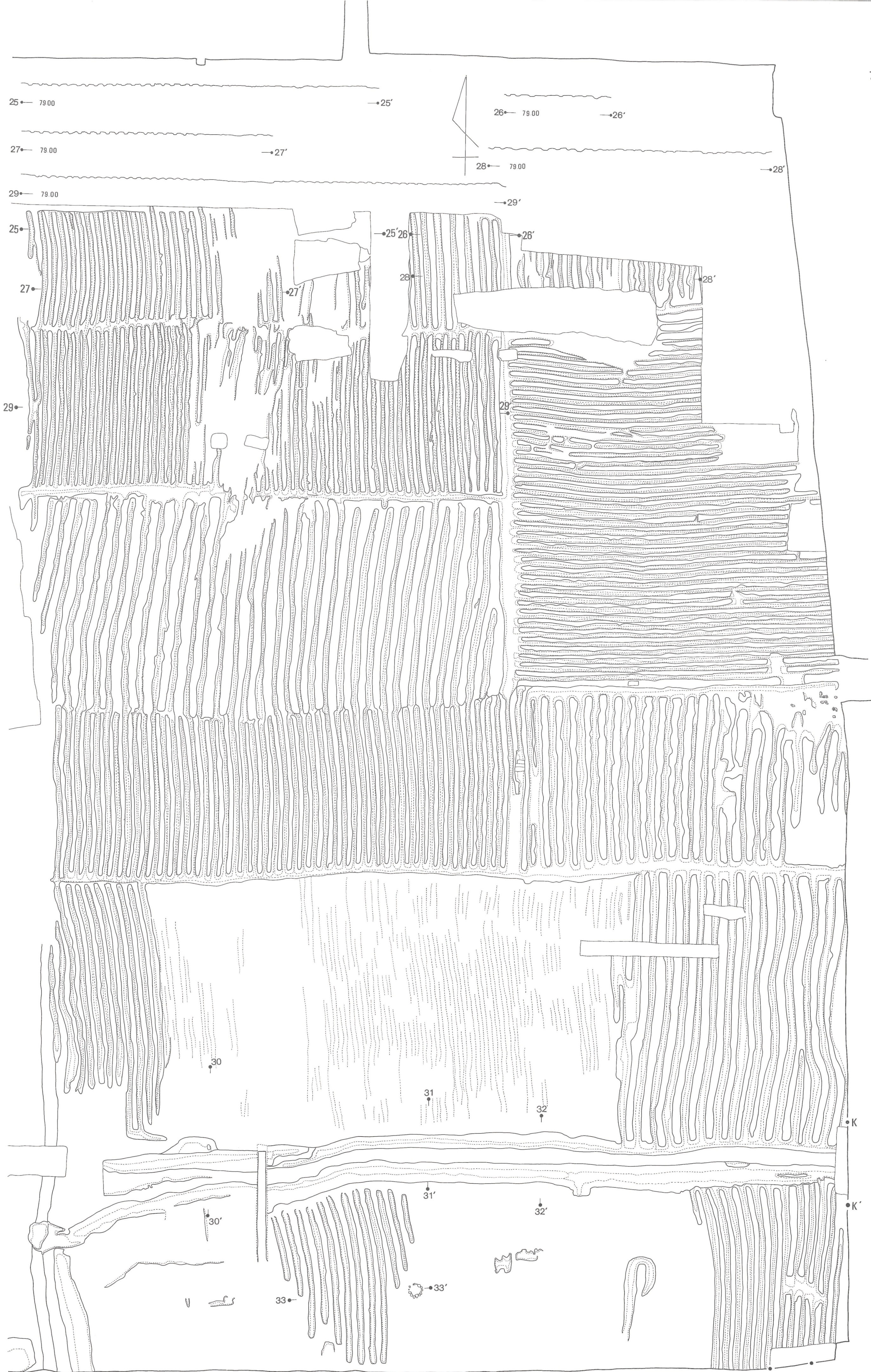
96-100

Y-67.875
X+37.085
100'
96-105

0 1 : 300 20m

付図1 F A下水田址全体図





付図3 A区畝状遺構全体図

94集(120, 121, 122) 西横手遺跡群